

筑波研究学園都市における新旧住民の 交流とアクセント (2)

堀口純子

I. はじめに

茨城県新治郡桜村は、利根川から北へ30キロの茨城県南部に位置する(図1)無アクセント地域で、長い間人口1万に満たない純農村地帯であった。しかし、村のおよそ25%¹⁾にあたる地域に筑波研究学園都市が建設されたことによって、昭和45年には9,198人であった人口が、47年からの研究機関の移転にともなってふえ始め、54年12月には3万人をこえた。新しく移り住んだ新住民は47年3月には306人だったが、53年5月に新旧住民の数が逆転し、その後も新住民の数は増加を続けている²⁾。これらの新住民はほとんど東京およびその周辺にあった研究機関や大学の職員とその家族である。東京に住んでいたからといって東京式アクセントを持っているとは限らないが、新住民が村の総人口の60%以上を占めるようになった現在、無アクセントの桜村に東京式アクセントがかなりの勢いで入って来ていることは確かである。

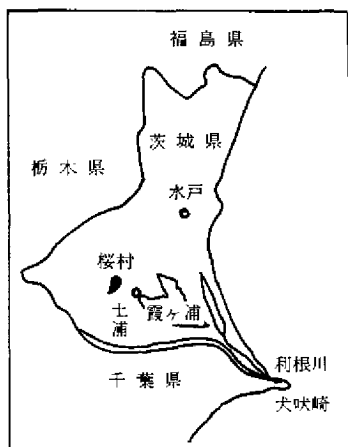


図 1

¹⁾ 昭和54年発行の『桜村勢要覧'79』によると、研究学園都市が占める割合は村域の38.8%となっているが、56年発行の『数字で見る村の姿』では25%となっている。

²⁾ 昭和57年3月1日発行の『県選管広報』によれば、52年と56年の市町村別有権者数増加数は、桜村が9,715人で県内1位となっている。

村は各種の公民館活動やスポーツ大会などを催したりして、新旧住民交流事業に力を入れている。小中学生は、文化祭、夏期学校、スポーツ大会などを通じて交流を深め、また、同じ学校で学んでいる者もある。このような交流が言語形成期に行われた場合、無アクセントの者と東京アクセントの者はお互いに相手のアクセントに何らかの影響を受けるだろうか。もし影響を受けるとすれば、それはどのような形であらわれるだろうか。また、影響の大小は交流の多少と関係があるだろうか。

このような点に注目して、昭和54年に研究学園地区にある竹園東中学校で、55年に農村地区にある桜中学校で、アクセント調査を実施した。竹園東中学校における調査結果は「筑波研究学園都市における新旧住民の交流とアクセント」（以下、「報告1」とする）として55年に、桜中学校における調査結果は「無アクセント地域における親と子のアクセント」（以下、「報告2」とする）として56年に、『文芸言語研究 言語篇』の5と6に報告した。

「報告1」では、生育地と桜村居住年数によって被調査者を3つのグループに分け、グループ間の比較に焦点をあてた。3つのグループとは、茨城県新治郡で生まれ育った者、東京で生まれ育ち桜村に移住して3年以上たつ者、東京で生まれ育ち桜村に移住して4か月未満の者で、報告の中ではそれぞれA群、B群、C群とした。「報告2」では、桜中学校の生徒とその両親との比較に焦点をあて、同一家族内における父と母と子供の比較、および、両親の世代と子供の世代の比較という2つの観点から報告した。本稿では、これらの2つの報告から3種類の被調査者を取り出してまとめ、調査の最初の目的であった、言語形成期における無アクセントの者と東京アクセントの者との交流によるそれぞれのアクセントへの影響について考察する。

II. 調査について

1. 調査時期

昭和54年～55年

2. 調査地点

- ① 茨城県新治郡桜村立桜中学校
- ② 茨城県新治郡桜村立竹園東中学校

桜村の中学校は現在3校で、農村地区に1校、学園地区に2校ある。桜中学

校（以下、桜中と略す）は農村地区にあり、昭和32年に開校した桜村で一番古い中学校である。竹園東中学校（以下、竹中と略す）は研究学園地区にあり、研究学園都市の開発にともなって昭和49年に開校した。

両校の生徒のアクセントの傾向をつかむため、2年生全員（桜中105人、竹中81人）の現在までの居住歴を調べた。これについてはすでに報告したので、両校の現状を1つの表にまとめて、簡単にふれるだけにす。表1は桜村在住年数を示す。表2は、桜村在住年数が7年以下の者、すなわち言語形成期の初期または初期から中期を桜村以外の地で過ごした者（桜中24人、竹中71人）について、その居住地をまとめたものである。

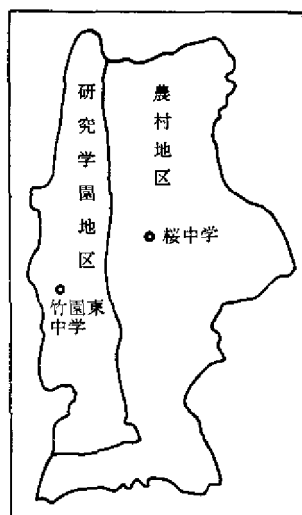


図 2

表1と表2から、桜中は81人が桜村で、12人が桜村以外の茨城県で言語形成期を過ごしたことが分かり、このことから93人すなわち桜中2年生の88.6%は茨城アクセントと考えられる。これに対して竹中は、茨城県で言語形成期を過ごした者が、桜村10人、桜村以外の茨城県4人の14人で、竹中2年生の17.3%である。あとの67人のうち24人は東京、19人は千葉、埼玉、神奈川から桜村に移住して来た者で、これら43人は言語形成期の初期あるいは初期から中期を東京またはその近郊で過ごしたといえる。その他の地域でも、アグ

表1. 桜村居住年数

年 数		13	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	1年未満	合 計
		14												
桜中	人 数	73	1	2	5	1	6	6	3	3	3	2		105
	小 計	81				24								
竹中	人 数	10				3	1	7	10	6	11	11	22	81
	小 計	10				71								

表 2. 桜村の前の居住地

アクセント 形 式	地 名	桜 中		竹 中	
		人 数	アクセント 形式別人数	人 数	アクセント 形式別人数
一 型 式	茨 城	12人	12人	4人	4人
東 京 式	東 京	3	12	24	55
	千 葉	1		9	
	神 奈 川	4		7	
	埼 玉	1		3	
	静 岡			1	
	山 梨			2	
	群 馬	1		1	
	長 野			2	
	広 島			1	
	福 岡	1		1	
岩 手		1			
札 幌	1		2		
第 一 種 京 阪 式	京 都 大 阪 三 重			1 3 1	5
第 三 種 京 阪 式	長 崎 鹿 児 島			1 1	2
	海 外			5	5

セント形式が東京式であるのが12人で、前述の43人とあわせると、55人(67.9%)は言語形成期を東京式アクセントの地で過ごしたといえよう。すなわち竹中の2年生は67.9%が東京式アクセントで、17.3%が茨城アクセントと考えられる。

3. 調査対象

- ① 桜群：「報告2」で取り上げた桜中学校の2年生20人³⁾(男10人、女10人)

³⁾ 「報告2」では両親との比較に焦点をあてたため、20人のうち両親のデータが得られなかった7人は除き、実際に取り上げたのは13人である。

- ② 竹A群：「報告1」で取り上げた竹園東中学校のA群8人（男4人、女4人）
- ③ 竹B群：「報告1」で取り上げた竹園東中学校のB群8人（男4人、女4人）

桜群、竹A群、竹B群の条件の差異をまとめると、表3のようになる。また付随的にも表4のような差異が見られる。桜群は家庭も学校も茨城アクセントの環境で、村や学校間の各種行事の時などに東京アクセントの者との交流がある。竹A群は、家庭は茨城アクセントの環境であるが、学校は東京アクセントの傾向が強く、また、東京アクセントの者との交流は毎日ある。竹B群は家庭も学校も東京アクセントの傾向が強い環境であるが、少数の茨城アクセントの者との交流は毎日あり、また、村や学校間の各種行事の時などには多くの茨城アクセントの者との交流がある。

表3. 基本的条件の比較

群 条件	桜 群	竹 A 群	竹 B 群
校 区	農村地区	学園地区	学園地区
出身地	桜 村	桜 村	東 京
桜村在住年数	13～14年	13～14年	3～7年

表4. 付随的条件の比較

群 条件	桜 群	竹 A 群	竹 B 群
親の出身地	茨 城	茨 城	各 地
親の職業	農 業	農業, 商業, 造園業, 工員	公 務 員
親の職場の所在地	農村地区	農 村 地 区 学 園 地 区	学 園 地 区
買物圏	日常の買物	近くの商店, 学 園地区のスー パーマーケット	学園地区のスー パーマーケット
	大きな買物	茨城県土浦市	茨城県土浦市 千葉県柏市 千葉県柏市 東 京

4. 調査方法

① アンケート調査

まず最初に、両校の2年生全員に、居住歴、両親の出身地、両親の職業、両親の職場の所在地、買物をする場所を記入してもらいアンケート調査を行った。これをもとにして選んだ被調査者に対して、下記の調査を行った。

② 読む調査

この調査は、被調査者のアクセントの実態をつかむことを目的とし、漢字・かなまじりで書いた単語、句、文を読んでもらって録音した。

③ 聞き取り調査

この調査は、被調査者が他の人のアクセントの型を知覚できるかということ、自分自身のアクセントを内省できるかということを見るのを目的とする。調査者が同一語または同一文を2~3種類のアクセントで発音するのを被調査者に聞いてもらって、内省した自分のアクセントと同じだと思えるものを選んでもらった。

④ 意識調査

被調査者が、桜村と東京のアクセントの違いに気が付いているかどうか、その違いに自分が影響を受けていると感じているかどうか、などをアンケートにより調査した。

III. 名詞・動詞のアクセントの実態

表5は、中学生が実際に発音したアクセントとその使用率を2拍名詞についてまとめたものである⁴⁾。また、比較のために桜群の両親の資料も併記したが⁵⁾、両親の発音のみに見られ中学生の発音には見られないようなアクセントは表には示さず、それが何種類あるかということだけを記す。たとえば、両親の項に「他2種」とあるのは、表示されたアクセントの他に2種類のアクセントがあるということである。

⁴⁾ 桜群のデータは、「報告2」では両親のデータがそろっている13人のものだけをまとめた。したがって、20人のデータをまとめた本稿の数値は「報告2」の数値と異なっている。

⁵⁾ 「報告2」では、父母子という観点から見たため、父親と母親の両方のデータがそろっているものだけを取り上げたが、本稿では母親だけのものもデータとしてまとめた。したがって、本稿の表は「報告2」の表と異なるところがある。

表 5. 2 拍名詞のアクセントの実態

東京式アクセントの型	調査語	単				文				頭			
		インフオーマントのアクセント	桜群	竹A群	竹B群	桜群の両親	インフオーマントのアクセント	桜群	竹A群	竹B群	桜群の両親		
平板型	風, 水, 雄, 人	○●	79.1%	95.3%	100%	36.3%	○●▶	87.1%	95%	100%	61.7%		
		●○	16.7	4.7		49.4	○●▷	7.2	2.5		29.1		
		●●	4.2			11.9	●○▷	0.7	2.5		1.5		
						他2種	●●▷	1.4			5.1		
							●●▶	3.6			2.6		
尾高型	雪, 紙, 川, 花, 事, 部屋	○●	89.4	98.4	100	37.5	○●▷	63.3	87.5	100	68.4		
		●○	8.7	1.6		49.6	○●▶	36.7	12.5		26.8		
		●●	1.9			8.9					他2種		
						他3種							
頭高型	窓, 糸, 海, 空, 本, 今日	●○	73.0	92.9	100	75.7	●○▷	67.9	77.5	100	42.3		
		○●	21.0	7.1		17.2	○●▶	8.6	20.0		33.7		
		●●	6.0			6.4	○●▷	22.8	2.5		21.4		
						他1種	●●▷	0.7			2.0		
											他1種		

注 ●, ▶ は高い拍, ○, ▷ は低い拍, ▶, ▷ は助詞を示す。以下同じ。

桜群は、単独の場合どの型の語にも、○●と●○と●●の3種が使われているが、使用率を見ると、東京式アクセントと同じ型が70%以上使用されている。助詞を付けて発音した場合には、尾高型名詞の発音に2種、頭高型名詞の発音に4種、平板型名詞の発音には5種もの型が見られ、一定の型がないようである。しかし、その割合を見ると、どの型の名詞の場合にも60%以上が東京式アクセントと同じ型で、2番目に多いのが○●▶である。桜群は竹A群・竹B群に比べると、型の種類が多い。しかし、両親に比べると型の種類は少なく、東京式アクセントと同じ型の使用率が高い。

竹A群は、単独の場合どの型の語にも、○●と●○の2種が使われているが、東京式アクセントと同じ型が90%以上使用されている。助詞を付けて発音した場合には、2~3種の型が見られるが、使用率は東京式と同じアクセントが75%以上である。竹B群に比べると、竹A群の発音には異種のアクセントが見られるが、桜群に比べると型の種類が少なく、また、東京式アクセントと同じ型の使用率が高い。

竹B群は、どの型の語も完全に東京式アクセントで発音している。

表6~表9は、3拍名詞、4拍名詞、動詞の現在形、動詞の過去形について、それぞれ中学生が実際に発音したアクセントとその使用率をまとめたものである⁴⁾。また、表5同様、比較のための資料とするために、桜群の両親のデータを併記した⁵⁾。

拍数や品詞にかかわらず、2拍名詞の場合とほぼ同じような傾向が見られる。すなわち、桜群は、竹A群・竹B群に比べると型の種類が多い。表には東京式アクセントが同じ語を一まとめにして示してあるが、1語ずつ調べてみると、桜群で全員が同一語を同じアクセントで発音している例は、「図書館」と「切った」の2語である。その他の語には、2種類から多いものは5種類の型が見られ、一定の型がないと言えそうな実態を示している。しかしそれでも彼らの両親と比較すると、型の種類は少ない。また、いろいろな型が見られはするが、それらがどれも同じように使われているわけではなく、東京式アクセントと同じ型の使用率が高い。

竹A群も竹B群に比べると型の種類が多く、一定の型がないと言えそうな実態を示している。しかし、桜群に比べれば型の種類は少なく、1語に見られる異種のアクセントは2~3種類である。全員が同じアクセントで発音している語も「時間」「かばん」「子供」「鉛筆」「友達」「図書館」「図書館(へ)」「切った」「積もった」の9例で、桜群より多く、また、東京式アクセントと同じ型

表 6. 3 拍名詞のアクセントの実態

東京式アクセントの型	調査語	単 独					文 頭				
		インフォーマントのアクセント	桜群	竹A群	竹B群	桜群の両親	インフォーマントのアクセント	桜群	竹A群	竹B群	桜群の両親
平板型	かばん, 時間, 子供	○●●	80.0%	100%	100%	32.1%	○●●▷	91.7%	91.7%	100%	57.1%
		●○○	13.3			21.4	○●●▷	8.3	8.3		36.9
		○●○	3.3			31.0					他2種
		●●○	3.4			15.5					
尾高型	はさみ, 力刀, 頭	○●●	66.0	77.5	45.0	27.2	○●●▷	62.0	75.0	75.0	56.0
		○●○	32.0	22.5	55.0	67.1	○●○▷	10.0	25.0	22.5	12.5
		●○○	2.0			2.1	○●●▷	27.1		2.5	29.1
						他1種	●○○▷	1.0			他2種
中高型	心	○●○	25.0	25.0	25.0	71.4	○●○▷	15.0			3.6
		○●●	70.0	75.0	75.0	21.4	○●●▷	65.0	87.5	100	67.8
		●●○	5.0			3.6	○●●▷	20.0	12.5		28.6
				他1種							
頭高型	荷 物	●○○	80.0	75.0	100	82.1	●○○▷	55.0	62.5	100	21.4
		○●○	20.0	12.5		10.7	○●○▷	25.0	25.0		53.6
		○●●		12.5		3.6	○●●▷	15.0	12.5		17.9
						他1種	○●●▷	5.0			7.1
頭高型 平板型	電 車	●○○	5.0	12.5		67.9	●○○▷	15.0	12.5		32.1
		○●●	85.0	87.5	100	17.8	○●●▷	70.0	62.5	100	42.9
		○●○	10.0			7.1	○●○▷	15.0	25.0		14.3
				他2種						他1種	

表 7. 4 拍名詞のアクセントの実態

東京式アクセントの型	調査語	単 独					文 頭				
		インフオーマントのアクセント	桜群	竹A群	竹B群	桜群の両親	インフオーマントのアクセント	桜群	竹A群	竹B群	桜群の両親
平板型	鉛筆, 友達	○●●●	62.5%	100%	100%	25.0%	○●●●▶	95.0%	87.5%	100%	50.0%
		○●●○	25.0			37.5	○●●●▷	5.0	12.5		25.0
		●○○○	2.5			8.9					他4種
		○●○○	7.5			12.5					
		●●○○	2.5			10.7					
					他2種						
尾高型 中高型 (○●●○)	雷, 年寄り	○●●●	20.0	25.0		14.3	○●●●▷	35.0	6.2	12.5	23.2
		○●●○	70.0	75.0	93.8	67.8	○●●○▷	40.0	93.8	87.5	28.6
		○●○○	10.0		6.2	3.6	○●●●▶	25.0			43.8
					他4種					他2種	
中高型 (○●○○)	図書館, 自動車	○●○○	82.5	81.3	68.8	76.7	○●○○▷	52.5	81.3	68.8	37.5
		○●●●	12.5	18.7	31.2	12.5	○●●●▶	30.0	6.2	31.2	42.9
		○●●○	5.0			1.8	○●●○▷	10.0	12.5		7.1
						他1種	○●●●▷	7.5			12.5
頭高型 平板型	音 楽	●○○○	70.0	75.0	100	14.3	●○○○▷	40.0	75.0	100	3.6
		○●●●	20.0	12.5		14.3	○●●●▶	40.0	12.5		28.6
		○●○○	10.0			53.6	○●○○▷	20.0			28.6
		○●●○		12.5		10.7	○●●○▷		12.5		28.6
						他1種					他1種

表 8. 動詞現在型のアクセントの実態

拍数	東京式アクセントの型	調査語	インフォーマントのアクセント	桜群	竹A群	竹B群	桜群の両親
2拍	平板型	乗る, 聞く, 行く, 買う	○● ●○ ●●	50.0% 46.3 3.7	93.8% 6.2	100%	35.7% 56.3 8.0
	頭高型	吹く, 成る	●○ ○● ●●	85.0 5.0 10.0	81.3 12.5 6.2	100	78.6 16.1 5.3
3拍	平板型	あける	○●● ●○○ ○●○ ●●○	55.0 20.0 25.0	87.5 12.5	100	35.7 14.3 39.3 7.1 他1種
	中高型	泳ぐ, 走る	○●○ ○●● ●○○	82.5 5.0 12.5	87.5 12.5	100	75.0 8.9 7.1 他2種
4拍	平板型 中高型 (○●●○)	飲み込む	○●●● ○●●○ ○●○○	25.0 60.0 15.0	37.5 62.5	12.5 87.5	7.1 64.3 17.9 他2種
5拍	中高型 (○●●●○)	振り回す	○●●●○ ○●●●● ○●●○○ ●○○○○	60.0 5.0 30.0 5.0	75.0 12.5 12.5	87.5 12.5	17.8 3.6 71.4 他2種
	平板型 中高型 (○●●●○)	よじ登る	○●●●● ○●●●○ ○●●○○	30.0 55.0 15.0	25.0 62.5 12.5	100	14.3 39.3 46.4

の使用率も桜群より高い。

竹B群は、東京語でアクセントが安定している語については、全員が東京式アクセントで発音している。このことから、竹B群は一定の型を持っていて、それは東京式アクセントであるといえよう。東京語でアクセントがゆれている語については、竹B群でも2種類のアクセントが見られる。新しい型と古い型

表 9. 動詞過去形のアクセントの実態

拍数	東京式アクセントの型	調査語	インフォーマントのアクセント	桜群	竹A群	竹B群	桜群の両親
3拍	平板型	咲いた 鳴った	○●●	55.0%	87.5%	100%	21.4%
			●○○	40.0	12.5		60.7
			○●○	2.5			1.8
			●●●	2.5			7.1
							他1種
	頭高型	切った	●○○	100	100	100	85.7
							他1種
4拍	中高型 (○●○○)	積もった	○●○○	95.0	100	100	53.6
			●●○○	5.0			
							他2種
5拍	平板型	飲み込んだ	○●●●●	15.0	37.5	12.5	7.1
			○●●○○	75.0	62.5	87.5	82.1
			○●●●○	10.0			
							他3種
6拍	平板型	よじ登った	○●●●●●	20.0	12.5		10.7
			○●●●○○	80.0	87.5	100	35.7
							他2種

とどちらが多く使われているかは語によって違うが、新しい型が多いのは、「はさみ」「心」「電車」「雷」「年寄り」「自動車」「飲み込む」「よじ登る」で、古い型が多いのは、「力」「刀」「頭」「音楽」である。この竹B群の結果は、東京の中学生に実施した調査から得た結果と全く同じである。このことから、「はさみ」「心」「電車」「雷」「年寄り」「自動車」「飲み込む」「よじ登る」などは、竹B群の中学生が東京で子供だった頃に、その世代ではすでに新しい型の勢力の方が強く、それを身につけて桜村に移転し、そのまま使い続けていると考えられる。あるいは、ココロからココロへのようにアクセントの山を一つ後ろへずらず現象や、デンジャからデンジャへのようにアクセントの滝がなくなる現象はアクセントの自然な内的変化であるから、このような語については、東京で現在新旧どちらの型が多く使用されているかに関係なく、言語習得のいずれかの段階でこの型を身につけたと考えることもできる。

IV. 優勢なアクセントと安定度

1. 型の数

本稿で取り上げた調査語の延べ語数は、名詞 66 語、動詞 18 語で、合計 84 語であるが、それらが何種類のアクセントで発音されているかを 1 語ずつ調べ、それによって 3 グループのアクセントの安定度を見ることにする。アクセントの型数別に語数を合計したものを表 10 に、1 語あたりの型の数の平均を表 11 に示す。

表 10. アクセントの型数と語数

品 詞	型の数	語 数			
		桜 群	竹 A 群	竹 B 群	桜群の両親
名 詞	1	2語	31	51	
	2	26	30	15	9
	3	33	5		24
	4	4			25
	5	1			7
	6				1
動 詞	1	1	4	15	
	2	6	11	3	2
	3	10	3		8
	4	1			2
	5				6

型が 1 つでアクセントが安定しているのは、桜群 3 語、竹 A 群 35 語、竹 B 群 66 語である。型の種類が 2 つの語は、桜群 32 語、竹 A 群 41 語、竹 B 群 18 語であるが、このうち、桜群の 3 語、竹 A 群の 15 語、竹 B 群の 12 語に使用されている 2 種の型は、どちらも東京式アクセントとして辞典に記述されているものである。したがって、この語数と、型が 1 つの語数とを、延べ語数からひいた語数—桜群 78 語、竹 A 群 34 語、竹 B 群 6 語—が、東京式と同じアクセントのほかにも、辞典に記されていないようなアクセントでも発音されている語の数ということになる。竹 B 群の 6 語の中で東京アクセントと異なるものはフリマウスとカミナリの 2 例である。他の 4 例はハサミ、ハサミ (ガ)、ノミコンダ、ヨジノボッタで、最近の東京語に見られる新しい傾向と同じアクセント

である。

桜群には、型の数が5つの語が1語ある。これは、同一語の発音に5つの異なるアクセントが使用されたということである。型の数が4つの語は5語である。竹A群、竹B群には、同一語に4種類以上のアクセントが使用された例がないということから考えると、桜群は竹A群・竹B群に比べてアクセントが不安定であるといえよう。しかし、彼らの両親の発音を見ると、型の数が5つの語が13語あり、同一語が6種類の異なるアクセントで発音されている例さえある。したがって、両親に比べれば、桜群の不安定の度合は低いといっていよう。

竹A群は型が3つの語が8語あるが、竹B群は型が3つ以上の語は全くない。

以上のことから、アクセントの安定度は、竹B群、竹A群、桜群の順で下がるということができる。

表 11. アクセントの型数の平均

品 詞	型 の 数 の 平 均			
	桜 群	竹 A 群	竹 B 群	桜群の両親
名 詞	2.6	1.6	1.2	3.5
動 詞	2.6	1.9	1.2	3.7

このことは、表11に示された1語あたりの型の数の平均を見ても明らかである。すなわち、竹B群は1語につき平均1.2種類のアクセントということで最も安定した姿を見せ、竹A群は名詞1.6種類、動詞1.9種類で竹B群よりは安定度が低く、桜群は2.6種類で竹A群・竹B群に比べると不安定であるが、両親の名詞3.5種類、動詞3.7種類に比べれば不安定な度合は低い。

2. 優勢なアクセント

各項目における優勢なアクセントを見ると、ほとんど東京式アクセントと同じ型である。そこで、東京式アクセントと同じ型の使用率を表12に示す。

型の数(表10, 11)だけを見ると、桜群と竹A群には一定の型がないといえそうだが、アクセントの使用率を見ると、東京式アクセントと同じ型の使用率が桜群71.6%、竹A群80%と、かなり高いことが分かる。竹B群は表12だけ

表 12. 東京式アクセントと同じ型の使用率

品 詞	使 用 率			
	桜 群	竹 A 群	竹 B 群	桜群の両親
名 詞	70.3%	80.8%	87.6%	40.6%
動 詞	72.8	79.2	83.3	39.0
平 均	71.6	80.0	85.5	40.1

を見ると 14.5% は東京式アクセントではないといえそうであるが、そのほとんどは新しい東京アクセントと考えられる型と同じである。

V. 聞き取り調査による型知覚

読む調査と聞き取り調査の結果をつき合わせ、各人の実際の発音と内省した型とのくいちがいについて見ることにする。くいちがいは、たとえば「電車」という語を、読む調査ではデンシャと発音し、聞き取り調査では調査者の発音したデンシャというアクセントが自分のアクセントと同じだと内省したような例のことをいう。くいちがいの割合（以下、くいちがい率という）を品詞別に示したのが表 13 で、個人別にくいちがい率を求め、グループの中での最高と最低を示したのが表 14 である。

表 13. 実際の発音と内省した型とのくいちがい率
(品詞別)

品詞	群		
	桜 群	竹 A 群	竹 B 群
名 詞	45 %	41 %	12.1%
動 詞	57.5	43.8	3.2
平 均	48.6	41.8	9.5

表 14. 実際の発音と内省した型とのくいちがい率
(個人別)

	桜 群	竹 A 群	竹 B 群
最 高	75.0%	54.2%	33.3%
最 低	16.7	12.5	0

くいちがい率の平均を見ると、桜群、竹A群、竹B群の順で低くなっている。その他、表には示していないが、「わからない」という答が、桜群に1.9%、竹A群に1.8%あった。桜群・竹A群の実際の発音と内省した型とのくいちがいや、「わからない」という答は、自分のアクセントを内省することができないということに起因するとも、他の人のアクセントを聞き取ることができないということに起因するとも、あるいはその両方が原因になっているとも考えられる。ただ、調査の時に桜群の場合は、「おれ、どういうふうに言ってるかな」とか「(調査者のアクセントは)どっちもおんなじみたい」とか「わからんな」とかいうようなことがしばしば聞かれ、また口の中で調査語を何度もくり返すということが1語ごとに行われたため、調査に31分かかり、竹A群の15分、竹B群の12分の倍以上であったということから考えると、内省にも聞き取りにも困難があり、したがって、両方から同じアクセントを選んで結び付けることにも困難があるといってよいだろう。竹A群の場合にも桜群と同じような一人言が聞かれ、また調査語を口の中でくり返すこともあったということから見ると、桜群と同じような困難があると考えられる。しかし、一人言やくり返しの回数は桜群に比べると少なく、したがって調査時間は桜群の約半分、竹B群とほぼ同じ15分ですんだ。竹B群のくいちがいは桜群や竹A群に比べるとかなり少なく、平均すると91%は実際の発音と内省した型が一致している。くいちがいがあるのは現在東京語でアクセントがゆれている語のみであるということ、くいちがい率は東京語の話者とほぼ同じであるということなどから、竹B群のくいちがいは東京語におけるアクセントのゆれに起因していると考えられる。調査者の発音を聞くと迷うことなくすぐに記入していたことや、くいちがい率の低さから見て、竹B群は内省して自分の型を知覚することにも、他の人の発音を聞いてその型を知覚することにも困難はないと考えられる。

以上のようにグループ別に見ると、グループ間で差が見られるが、被調査者全員を個人別に見ると、かなり個人差のあることが分かる。桜群のくいちがい率の最高と最低では約60%の開きがあり、最低の16.7%は竹B群の最高より低い。ということは、桜群の中に竹B群の者よりくいちがいの少ない者がいるということである。桜群のくいちがい率が最低の生徒は、おじ、おば、いとこなどが東京にいること、そのいとこたちは東京生まれであること、東京の親戚との行き来がひんばんにあること、その生徒自身もよく東京へ行くことなどが面接調査で分かった。またアンケート調査には、自分のことばと東京のことばが違うことを意識し、東京の人と話す時は使い分けると記入している。このよ

うなことが、この生徒のくいちがい率の低さに関係しているものと考えられる。竹B群は8人中7人がくいちがい率17%以下で、くいちがい全くなかった者も1人いるが、1人だけ33.3%と高率の者がいる。この生徒は、桜村に移転したのが8歳の時で、竹B群の中で桜村在住年数が最も長く、また父親が茨城県出身である。このようなことが、この生徒のくいちがい率の高さに関係しているのではないかと考えられる。

VI. ま と め

無アクセント地域である茨城県新治郡桜村で、桜村で生まれ育ち両親も茨城県出身である農村地区の中学の生徒(桜群)、桜村で生まれ育ち両親も茨城県出身である学園地区の中学の生徒(竹A群)、東京で生まれ育ち桜村に移住して3年以上たつ学園地区の中学の生徒(竹B群)の3つのグループを対象にアクセント調査を行った結果、次のようなことが明らかになった。

①同一語を全員同じアクセントで発音している場合と、人によってアクセントが異なる場合があるが、一語の発音に見られるアクセントの型の数を平均すると、竹B群1.2、竹A群1.8、桜群2.6、桜群の両親3.6で、これを図示すると次のようになる。

竹B群<竹A群<桜群<桜群の両親

②竹B群では同一語がほとんど同じアクセントで発音されているが、桜群・竹A群ではいろいろなアクセントで発音されている。しかし、それらが同じように大差なく使用されているわけではなく、その中に使用率の高い優勢な型が見られる。その優勢な型は東京式アクセントと同じ型である場合が多く、その使用率の平均は、竹B群85.5%、竹A群80%、桜群71.6%、桜群の両親40.1%で、これを図示すると次のようになる。

竹B群>竹A群>桜群>桜群の両親

③桜群は自分のアクセントの内省にも調査者のアクセントの聞き取りにも、かなり困難を見せている。竹A群は同様な困難を見せながらも、60%近くの項目について自分のアクセントを内省し、かつ調査者のアクセントを聞き分けて自分のと同じ型を知覚することができる。竹B群は困難なく内省し聞き分けて

いる。実際の発音と聞き取り調査で内省した型とのくいちがい率の平均は、竹B群9.5%、竹A群41.8%、桜群48.6%で、これを図示すると次のようになる。

竹B群<竹A群<桜群

桜群・竹A群は、同一語の発音にいろいろな種類のアクセントが使われ、型が一定していないという無アクセントの姿を見せながらも、その中に優勢な型が見られ、それはほとんど東京式アクセントと同じ型である。40年余りを無アクセント地域で生活してきた両親には桜群・竹A群よりもっと多くの種類のアクセントが見られ、優勢な型がない。桜群・竹A群と両親とのこの差には、言語形成期のテレビ・ラジオ、および東京からの移住者との交流などによる影響が考えられる。

桜群と竹A群とは同じような傾向を見せながらも、一語の発音に使用されるアクセントの種類、優勢な型の使用率、実際の発音と内省とのくいちがい率などにおいて、数値的には差が見られる。アンケート調査によると、両群の被調査者が視聴しているテレビ・ラジオ番組は同じようなものであるということから考えると、桜群・竹A群がテレビ・ラジオから受ける影響にはほとんど差がないといえよう。したがって、桜群と竹A群の差は、東京語話者との交流が、桜群は文化祭、夏期学校、スポーツ大会などの時に限られているのに対して、竹A群は毎日学校で多くの東京語話者と接しているということからきているのではないかと考えられる。

竹B群は型が安定していて、東京式アクセントが圧倒的に優勢である。また、実際の発音と自分のアクセントを内省して知覚した型とがよく一致している。

言語形成期の初期を東京で過ごした者は、そこで習得した東京式アクセントを無アクセント地域に移住しても持ち続け、無アクセントの者と日常的に接していても、その影響はほとんど受けない。一方、無アクセント地域で生まれ育った者の場合、言語形成期に東京式アクセントの者と日常的な接触がある者とならない者の間には差異が見られ、その差異は東京式アクセントの影響があるかないかによるものと考えられる。しかし、本調査の被調査者の年齢と調査結果を考え合わせると、東京式アクセントの者との接触の時期が言語形成期の後期である場合、たとえその影響を受けても、無アクセントの特徴が消えることはな

く、したがって、完全に東京式アクセント化することはないと考えられる。東京式アクセントとの接触の時期が言語形成期の初期であった場合、無アクセント地域で生まれた者のアクセントにどのような影響が見られるかということは、今後の課題としたい。

この調査の実施にあたって、調査の便宜をはかってくださった桜村立桜中学校の小松崎光男校長、原 孝吉先生、竹園東中学校の天貝 茂校長、高野幸男先生、また、調査に協力してくださった2年生のみなさんと御両親に心から感謝いたします。

この調査研究は、昭和55年度の文部省科学研究費（課題番号571131）の補助を受けて行われた。

参 考 文 献

- 秋永一枝・佐藤亮一・金井英雄「利根川上・中流域のアクセント」『利根川—自然・文化・社会—』弘文堂、昭和46年
- 稲垣滋子・堀口純子「東京語におけるアクセントのゆれ—地域差・意識と実態—」『ことばの諸相』文化評論出版、昭和54年
- 木野田れい子「埼玉県南埼玉郡久喜町のアクセント—曖昧アクセントから東京アクセントへ—」『都大論究』10、昭和47年
- 金田一春彦監修 秋永一枝編「明解日本語アクセント辞典」三省堂、昭和56年
- 佐藤亮一「曖昧アクセント地域における話者の型意識について—「比較発音による調査」から—」『ことばの研究』4、秀英出版、昭和49年
- 佐藤亮一「アクセントの「ゆれ」をめぐって—曖昧アクセント地域を中心に—」『青山語文』4、昭和49年
- 徳川宗賢編『論集日本語研究2 アクセント』有精堂、昭和55年
- 日本放送協会編「日本語発音アクセント辞典」、昭和53年
- 平山輝男編『全国アクセント辞典』東京堂出版、昭和49年
- 平山輝男「移住者二世の言語—特に無アクセント地域の場合」『国語学』114、昭和53年
- 堀口純子「筑波研究学園都市における新旧住民の交流とアクセント」『文芸言語研究 言語篇』5、昭和55年
- 堀口純子「無アクセント地域における親と子のアクセント」『文芸言語研究 言語篇』6、昭和56年
- 馬瀬良雄「言語形成に及ぼすテレビおよび都市の言語の影響」『国語学』125、昭和56年
- 『県選管広報』茨城県選挙管理委員会発行、昭和57年
- 『数字で見る村のすがた』桜村役場企画課発行、昭和56年